

利便性について：潜在能力を奪われること

高槻成紀

私たちが子供だった太平洋戦争の後は科学への大きな期待があり、科学の発展は生活の利便性を約束すると信じられていた。子供に人気のあった漫画の代表は「鉄腕アトム」だったが、その主題歌に「心やさしい、ラララ、科学の子」という歌詞がある。敗戦が非科学的であったからだという痛みもあったし、なによりも毎日の困窮生活を脱するためには豊かにならねばならぬ、そのためには迷信や無駄を配して合理的に生きなければならない、それを可能にするのは科学的精神だといった雰囲気があった。

「発明発見」がうながされ、偉人伝には必ずエジソンやワットが入っていた。理科の実験や工作にも、技術を優先したものが多かったように思う。手塚治虫は私の尊敬する漫画家で、人類愛やその名のオサムシに代表されるように生き物への賛美の記述もあるが、同時に、まさに鉄腕アトムに代表されるように、科学技術の発展に対する期待をもつ人でもあったように思う。

だが、手塚治虫の作品だったかどうか記憶が定かではないが、将来は道路が動くので歩かなくてもよくなるという画面を見たとき、私はそのほかのいろいろな便利なものをおもしろいと思っていたなかで、その動く道路やその周囲のビルのある空間をなんだか気持ち悪いと感じたのを覚えている。

モンゴルでしばらく生活していると、日本であたりまえのものがあたりまえでないことに気づく。もっとも自動車を使っただけの調査生活だから、本来のモンゴルの牧民生活に比べればずいぶん「日本的」なのだが、それでもそう感じることもある。薪割りをしたり、ストーブの火をつけたり、水を汲

んできて溜めて少しずつ使わなければならないとか、重い物を長距離運ぶときに感じる腕のたるさとか、あるいは連絡のしようがないときは待つしかないと悟ることなどがそのささやかな例だが、これらはしばらく前には日本にもあったもので、私などはなつかしいような感覚を覚える。そうした生活がモンゴルでの生活で身に付いてきたところに帰国し、成田に着くと、まさに「動く道路」があり、当惑する。「足があるのだから、歩けばいいだろう」と思う。

あるときゴビの砂漠のようなところに一人で残ることになり、車が視界から消えて数時間たったときの不安と、そのあと車が帰ってきたときの安堵は忘れられない。また草原に選定ばさみを置き忘れたときに、その場所をいいあてたモンゴル牧民もいた。そうした経験を通じて。モンゴル人の地理感覚とわれわれのそれがまったく違うことに気づく。視力の違いも驚くべきものだが、そういう物理的な視力だけではなく、動物を見つけるカンのようなものも相当違う。

私たちは生活の利便性を求め、新しい技術が生まれたとき、「これであの不便さから解放された」と喜ぶが、私はこのごろ「これで本来持っていた能力がまた封じられる」と思うようになった。そんな前に前のことではない。わずか5年ほど前でも、私たちは場所と時間を指定して落ち合った。携帯電話はなかったが、何も問題はなかった。人は長いあいだそうしてきたのだ。そういう意味ではいつでもどこでも連絡ができるということのほうがよほど「異常」なことなのだ。

大学の「演習」で学生にスケッチをさせている。そのひとつとして、大学に飼われているヒツジやブタをスケッチさせた。そして同時に写真に撮ってそれをスケッチすることもさせた。おもしろいことに出来は微妙だった。正確さという意味では写真を見て描く方がうまくいくようだった。ただ動物から受ける印象の表現としては生の動く動物を見て描くほうが生き生きしている作品もあった。でもどちらもほとんど違わないものや、写真のほうがむしろ生き生きしているケースもあった。

そのときに思ったのは、「写真以前」の画家がどうしてあれだけ正確に動くものをとらえることができたのだろうということだ。彼らは動くものを全身全霊でとらえるべく見つめ、網膜に、いや脳に焼き付ける訓練をしたに違いない。そういえば我々は写真にとることを当然とするようになったために、動物の動きをとらえる能力を封じられたとみることができるだろう。

音楽や舞踊にいたればなおさらである。音も踊りも「残す」ことはできなかった。できないだけに、人はそれを聴き、観るとき、瞬間瞬間に対して、一期一会の思いで真剣勝負をしたに違いない。それが可能であったし、本来人間はそういう能力をもっているのだ。それが便利と信じられている器機の発達によって弱められ、そうした能力は潜在的にもっているのに発達の機会が奪われるようになった。

生まれてきた赤ん坊は昔変わらずお乳を

飲み、爪が伸び、やがて歯も生えてくる。心も同じように育ってゆくはずだが、このままいけば、心にだけヒトが経験したことの無い発達を強いることになるだろう。誰でも生まれて初めてみた世界が当たり前の世界であり、その人の基準になる。その基準が本来のヒトのそれと隔たれば隔たるほど、恐ろしいことが起きるような気がする。

手塚治虫は普遍性を求めた作家だが、若い頃の科学への過度な信頼はやはり時代に飲み込まれていた結果なのだと思う。彼は晩年になり、もっと普遍的な人類愛を描くようになるのだが、日本の社会はそのことに気づくどころか、科学というより、器機への依存度をますます強めている。この文章を書いて気づいたのだが、鉄腕アトムの主題歌の歌詞の「科学の子」の前にある「心やさしい」というひとことがとても大切だったのではないか。深読みしすぎかもしれないが、科学は心やさしくなければならぬ。心を忘れた科学は危険でさえある。あの歌詞には実はそういう思いもこめられていたのかもしれない。

生まれてまだ半年しか経たない柔らかな孫を胸に抱きながら、現代社会を覆う器機への過度の信頼という恐ろしい波からこの子らを守ってやらねばと思った。